

軍隊の人的リソースに関する一考察

グレーチェンの旅・序章

「帝国軍に女性がいないってのはホントだぜ。受付にも野郎が座つていやがった」

オーデイン

旧帝都を訪れたオリビエ・ポプランが、身も蓋もない感想を言葉の形にして同行者たちの苦笑を誘ったのは、動乱の時代、あるいは英雄の時代が今にもその幕を閉じようとする頃だった。実のところ、ポプランの感想は必ずしも真実を言い当てたものではなく、帝国軍にも少数ではあるが女性の士官や兵卒は存在した。ただし、かつてシュミットバウアー子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデがそれを切望しつつも、ついに帝国軍士官学校への入学を許されなかったように、帝国の女性たちに帝国軍組織への正規の門戸が開かれていたわけではない。

女性士官の大半は勅任官であり、言い換えれば時の皇帝の『気まぐれ』により士官の地位が授けられているケースがほとんどだった。彼女たちは例外なく、いわゆる門閥貴族の子女であり、士官の肩書きを得て任地を与えられても実際に赴任して任務に就く例は皆無に等しかった。彼女たちにとって士官職は爵位や、極端に言えばドレスや装身具の類に過ぎず、仮に司令官職を与えられたとしても、それは過大なほどの収入を伴う名誉職でしかなかったのだ。

一方女性の兵卒……つまり下士官と一般兵士の場合はほとんどが辺境警備部隊や貴族の私兵部隊による現地採用であり、正規の帝国軍兵士ではなかった。彼女たちの場合は実際に任地にあつて、それぞれの職務に就くのが普通だったが、その職務は地上にしても宇宙にしても後方基地に限られており、やはり艦

隊勤務者はいないのが通例だった。

無論、何事にも例外はあるもので、帝国軍で高級士官の肩章を纏い、前線指揮官の地位に就いて同盟軍との干戈の場に身を置いた女性も極少数ながら存在することは存在するのである――が、彼女たちについて語るのは本稿の目的ではない。

帝国暦四八九年二月、ラインハルト・フォン・ローエングラム元帥は対フェザーン侵攻作戦『フィンブル・ベト恐るべき冬』を発令。実に一四個艦隊、兵力にして二〇〇万人を超える巨大な兵力を動員しての一大侵攻作戦である。

この作戦の発動を前に、ラインハルトはある命令をキルヒアイスに伝えている。

「女性の帝国軍士官への登用と、同じく志願兵への採用の検討……ですか？」

さしもの『帝国軍最高の驍将』も面食らうことはある。感じの良い青い目をぱちくりさせて、金髪の超絶美形の盟友を見詰めるさまが、二二歳という年齢相応に見えて、ラインハルトに近侍していたヒルダの微笑を誘った。

「ラインハルトさま、いいえ元帥閣下。一つ、確認させてください」

「お前の懸念は分かっている。帝国軍の女性全員がマリィンドルフ伯爵令嬢のように聡明であるとか、勇敢だとか錯覚してい

るわけではないぞ」

まるで恋人を手放しに誉め讃えるような台詞を、ラインハルトはごくごく事務的に放つ。キルヒアイスはちよつと毒気を抜かれた思いで、完璧な造形美を誇る、金髪の親友の顔を見直した。

これは完全に天然なんだろうな、とキルヒアイスは、ヒルダに視線を走らせる。できるだけ平静な表情を装おうとしているように見えたが、明らかに頬の色に紅の色彩が強い。

ラインハルトにしてみれば、事実を述べているだけのこと、ヒルダのことを誉めているという意識は全くないのだろう。一方のヒルダも、頬を染めはしても、別にそれが特段の親愛や、あるいは求愛を示すものではないことは十分に察しているようだった。彼女が少しは勘違いしてくれば、もう少し、この二人の関係も進展するのだろう、などとキルヒアイスは余計な気を回してみたりする。

「それなら安心です、閣下」

敬礼し、関連書類を収めた超小型ディスクを受け取った。

「それで、なぜ今の時期なのでしょう？」

「そうだな、話が前後した。帝国軍の兵力補充制度には大きな欠陥があることは知っているな」

「知っています」

帝国では、特に同盟との戦いが始まって以来、国民皆兵が建前となっている。しかし、実際には門閥貴族や富裕者、高級官僚の子弟は徴兵を免れ、兵役の義務は一部の平民にのみ課せら

れていたのが実情である。

「一部の平民……ですか？」

キルヒアイスも苦笑する。ラインハルトに従う形で幼年学校へ進み、そのまま帝国軍の士官となってしまうた彼だが、万一流行ハルトとの邂逅がなかったとしても、今頃は一介の兵士として前線に出ていたに違いないのだ。

「最大の問題は、徴兵逃れが許されていることに加えて、宇宙艦隊の兵員として動員可能な人たちが限られていることもあります」

ヒルダが補足した。大学に入った頃、ヒルダはその事実気づき、ローエングラム元帥府の一員となつてからは組織的な調査も進めてきた。平民と一括りにはされていても、帝国では貧富の差が非常に大きい。子弟に大学教育を受けさせることができる、いわば中産階層が薄い。一方、帝国軍、特に宇宙艦隊は軍隊には違いないが、その将兵が操るのは宇宙船である。扱いは少なくとも大学教育レベルの素養を要求されるのだ。

「……つまり、もともと人的資源として希薄すぎる中産階層の一部だけが帝国軍への人材供給を一手に押しつけられている……ということですね」

キルヒアイスは頷く。かつて『ハーメルン』で出会った多くの下士官と兵士たち。大学で優れた成績を上げていたにもかかわらず、一介の一等兵として絶望的な兵役生活を送る若者が何と多かったことが。

「徴兵逃れについては、既にオーベルシュタインが改善に着手

しているが、いずれ強制的な徴募による兵員の補充は取りやめるつもりだ」

ラインハルトの言葉にキルヒアイスは大きくうなずく。帝国の人口は約三〇〇億。年間の出生数は三億弱、男性だけでも一億を優に上回る。過去一五〇年の同盟軍との戦いで毎年三〇〇万を超える死傷者を出してきた帝国軍だが、出生者に対する比率は三パーセント以下であり、何も『国民皆兵』による強制的な動員は必要がない。もし、この一億数千万人の同年代の男性全てが、宇宙艦隊に勤務可能なだけの教育を受けられるならば……

無論、ラインハルトがフェザーンを制し、さらに同盟を下したなら、年数百万もの若者が戦場に無為に斃れることもなくなる。強制動員はますます必要なくなるのだ。

「なるほど、そういうことですね？」

「そうだ、そういうことだ……フロイライン」

「今回の動員開始の前に、帝国の各所では多くの人々が帝国軍への従軍志願を提出しています」

ヒルダが表示させた資料は、志願者がすべて男性のみに占められているのではないことを示して余りあつた。志願者の約三割強は女性だったのである。

「……わたしは、その……」

珍しくラインハルトの口調が闊達さを欠くのがキルヒアイスの注意を惹いた。

「女性までを前線に動員することに決して賛成……というわけ

ではない」

「閣下、私も決して、無条件に女性を戦場に駆り出せと申し上げているわけではありません」

ヒルダが柔らかに割って入るのに、キルヒアイスも半歩を進み出た。

「そうですね。現実には女性からの士官登用や女性兵の制式採用が制度として確立されたところには、今次の戦いも終わってしましよう。現実として、帝国軍の女性が実際に戦場に立つことがあるとしても、敵は同盟軍ではなくて、いることでしょうね」

名譽職としてのみ士官の階級を身に帯びる門閥貴族の女性は論外としても、現実に『現地採用』の形で軍に属している女性兵たちの待遇は酷いものである。同階級の男性兵士たちに対しても軍制式の採用ではないという理由で給与も低く、任地での条件も甚だしく悪い。戦死や殉職時の補償もほとんどないのが通例だった。中には兵士として採用しておきながら、実際には……などという目を覆わしめるような事例も報告されているほどだ。

「うむ……」

珍しくも白哲に薄く血の色を透かせながら、ラインハルトはかるく咳払いした。

この方にとつて女性とは、戦いとは無関係な場所を守るべきものという意識がなおも強いのだろう。世の中の女性全てがそうしたものではない、とはあの蛇夫人ダイメシコランベーネミュンデ侯爵夫人との闘いなどを経て、十分に知識としては身につけてはいる

のだろうけれど、それでも、この方にとつての女性という概念の具象はまず姉アンネローゼ上なのだから。

「……まあ、そういうことだ、キルヒアイス。オーベルシュタインに任せてある件に較べたら、こちらはもっと気長にやる必要があるだろうというのがフロイラインの意見だし、わたしもフロイラインに賛成だ……次の予定は三〇分後だったな？」

「ええ、第四作戦会議室で、後方支援に関する最終調整です」

「先に行っていてくれ。わたしも直ぐに向かう」

ちよつと怪訝そうにブルー・グリーンの視線がラインハルトを、それからキルヒアイスを通過した。が、特に反論すべきこともなかったらしい。小さく一揖すると、透明な光が閃いたような身のこなしでヒルダは身を翻した。

ヒルダの姿が扉の向こうに消えるのを確認し、キルヒアイスは軽く眉を寄せて、金髪の親友に視線を転じた。白大理石の彫像を思わせる横顔は、赤毛の若者の視線に気づかぬげに無表情を保っていたが、なおもキルヒアイスが見詰め続けると、その頬が淡く桜色に上気してくるのが分かった。

「さあ、ラインハルトさま。何を企んでいらっしゃるのかをお聞かせ下さい」

わざとらしく時計を見上げ、席を立とうとした瞬間を狙ってピンポイントの一撃を放つ。ラインハルトの長身がぎくんと揺れ、中途半端に腰を浮かせた姿勢で硬直した。

「な……にを、企んでいるって？」

「この件は確かにお預かりしました。ただ、時間をかけてもい